

第1章 「豊かさ」とは何か 人間開発指数（HDI）（1）

著者	野上 裕生
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	116
雑誌名	すぐに役立つ開発指標のはなし
ページ	10-17
発行年	2013
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017469

第1章 「豊かさ」とは何か——人間開発指数(HDI)(1)

人間開発指数(Human Development Index: HDI)は国連開発計画(UNDP)が『人間開発報告書』のなかで公表してきた開発指標である。「生活の質」「福祉の到達度」を計測したいという試みは一九七〇年代から始まったが、この時代の社会指標の成果を継承した指標のひとつがHDIである。

HDIの作成には、マブール・ハク、ポール・ストリーテンなどの研究者が参加している。とくに重要なのは、「ケイパビリティ」という概念によって発展をみなそうとしたアマルティア・センである。

● 「人間開発」という思想

UNDPの「人間開発」とは、発展あるいは開発を、人間の自由の拡大、選択の幅の拡大という視点から見直そう、という考え方である。一般に、人間の自由はお金(所得)や財

貨の大きさに比例すると考えられてきた。大局的にはそのような傾向があるかもしれないが、生身の人間の有り様は複雑である。たとえば、足に障害があつて歩くのに不自由な身体障害者にとつて、街や交通機関を利用するのに階段がたくさんあれば自由に移動することは難しい。仮に車を手配することになると、移動にかかる費用は足に障害のない人比べて極めて高くなる。

一円あるいは一〇〇万円という一定のお金である人がどのくらいのことができるのか、という自由や選択肢の幅（財や所得を自分の希望する活動や状態に転換する効率性）は、個人の状況（健康状態やジェンダー、年齢や社会的な地位など）に応じて多様であると考えられる。このような人間の多様性を考慮したうえで発展水準を評価するひとつの試みが、UNDPのHDIである。

● 人間開発指数の構成

HDIは、栄養や健康の状態を示す指標である平均余命、知識の水準を示す識字率と就学率、良好な生活に必要な資源の入手可能性を示す購買力平価（PPP）表示の一人あたり

GDPから構成されている。HDIの作成では、指標が人間の選択肢を評価できること、簡単な指標であること、多くの指標を総合した合成指標であること、社会指標と経済指標の両方を含むこと、改良の余地が残るように柔軟な方法論をもつこと、HDIの作成を契機にして各国に統計データの整備を促すことが要件とされた。

人間開発の考え方によれば、個人の自由は財貨への購買力を示す所得、およびその所得で自分がやりたいことをどのくらい実現できるのかという「所得から自由への変換効率」の両方から決められる。後者の「所得から自由への変換効率」は「ある人が一円、あるいは一〇〇万円でのどのくらいのことができるか」という個人の事情のことであるから、これに影響を与えるのは健康状態やジェンダー、年齢など無数にある。ただ、どのような人であってもその人の「知識」（あるいは教育）と「健康」（たとえば寿命）は特に大きな影響力をもつので、これらの三つ（健康、教育、所得）の指標を単純平均して作成したものがHDIである（「基本公式」参照）。

この指標に示されているのは、発展の評価は人間の能力や生活の善^{yu} (well-being) に焦点を置いておこなうべきであること、「人間開発」の概念を大胆に単純化して基礎的指標の簡単な指標にすること、人間生活の評価は所得や消費だけでなく知識や健康を含む多くの側

面に注目しなくてはならない、という思想である。

表1と表2は二〇〇九年の『人間開発報告書』の数値をまとめたものである。HDIの順位は必ずしも一人あたり所得順位と同じというわけではないので、このことから所得水準と実際の生活水準との間に多くの媒介要因があることがわかる。

一九九〇年の公表以来、HDIは試行錯誤を繰り返してきた。一番問題になるのは「基本公式」にある各指標の最高値と最低値の設定である。就学率や識字率は最低値ゼロ、最高値一〇〇が決まっているが、寿命や所得にはそ

基本公式	人間開発指数 (HDI)
平均寿命指数	$= \frac{\text{当該国の値} - \text{最低値}}{\text{最高値} - \text{最低値}}$
成人識字指数	$= \frac{\text{当該国の値} - \text{最低値}}{\text{最高値} - \text{最低値}}$
総就学指数	$= \frac{\text{当該国の値} - \text{最低値}}{\text{最高値} - \text{最低値}}$
教育指数	$= \frac{2}{3} \text{成人識字指数} + \frac{1}{3} \text{総就学指数}$
GDP 指数	$= \frac{\log(\text{当該国の値}) - \log(\text{最低値})}{\log(\text{最高値}) - \log(\text{最低値})}$
HDI	$= \frac{1}{3} (\text{平均寿命指数} + \text{教育指数} + \text{GDP 指数})$
出生時平均寿命：最高値85、最低値25。 成人識字率：最高値100、最低値0。 総就学率：最高値100、最低値0。 1人あたり GDP (PPP US\$)：最高値40,000、最低値100。	

表1 人間開発指数上位10位の国

国名	HDI (2007年)	平均余命 (2007年)	総(合成)就学率 (2007年)	1人あたりGDP (PPP US\$) (2007年)
ノルウェー	0.971	80.5	98.6	53,433
オーストラリア	0.970	81.4	114.2	34,923
アイスランド	0.969	81.7	96.0	35,742
カナダ	0.966	80.6	99.3	35,812
アイルランド	0.965	79.7	97.6	44,613
オランダ	0.964	79.8	97.5	38,694
スウェーデン	0.963	80.8	94.3	36,712
フランス	0.961	81.0	95.4	33,674
スイス	0.960	81.7	82.7	40,658
日本	0.960	82.7	86.6	33,632

(注) 成人識字率は100%の数字が割りあてられている。総就学率は学事年齢から遅れて就学する人などの影響で100%を超える数字が時々みられるが、HDIの計算では100%の数字が割りあてられている。

(出所) UNDP (2009) *Human Development Report 2009: Overcoming Barriers: Human Mobility and Development*, Palgrave Macmillanの統計から筆者作成。

表2 人間開発指数173位から182位の国

国名	HDI (2007年)	平均余命 (2007年)	成人 識字率	総(合成) 就学率 (2007年)	1人あたりGDP (PPP US\$) (2007年)
ギニアビサウ	0.396	47.5	64.6	36.6	477
ブルンジ	0.394	50.1	59.3	49.0	341
チャド	0.392	48.6	31.8	36.5	1,477
コンゴ民主共和国	0.389	47.6	67.2	48.2	298
ブルキナファソ	0.389	52.7	28.7	32.8	1,124
マリ	0.371	48.1	26.2	46.9	1,083
中央アフリカ	0.369	46.7	48.6	28.6	713
シエラレオネ	0.365	47.3	38.1	44.6	679
アフガニスタン	0.352	43.6	28.0	50.1	1,054
ニジェール	0.340	50.8	28.7	27.2	627

(出所) 表1に同じ。

のような値はない。そこで試行錯誤の結果、たとえば平均寿命は二五〜八五歳、一人あたり実質GDPは一〇〇〜四万 (PPPドル) となった。このように上限と下限を固定することによって時間を通じた比較が可能な指標になった。近年の『人間開発報告書』では所得は対数変換されて指標化されている。

● 人間開発指数の意義

豊かさや貧困削減といった発展の成果は、これまで所得で評価されることが多かった。しかし、低所得が本当に貧困といえるのか、いま一度考え直す必要がある。所得は人間の自由の手段のひとつであり、人間らしい最低限の生活に必要な所得や消費は個人々人によって違うからである。また施設やインフラなどが存在するということと、それを実際に利用することの間にギャップがあるので、施設やインフラへのアクセスが本当に人々の生活を改善できるのか、という問題は残されたままである。

このような問題は結局、貧困とは何か、豊かさとは何か、という問題を考えずに、所得といったひとつの要因を増やすことだけに注意を集中することからきている。本来「発展」

の成果の指標として望ましいものは、人々の生き方の自由を増やすことなのである。

したがって、HDIは発展をみる視点を所得以外の領域にまで拡大した点に意義があり、HDIそれ自体を発展の究極的な目標と考えるのは適切ではない。また、HDIによる国・地域のランキングもそれほど重要ではない。

● 人間開発指数の展開

HDIには非常に多くの批判があった。たとえば以下のようなものがある。

- HDIは国民の平均的到達度を示すので、貧困や格差は考慮されていない。
- HDIには政治的自由や民主主義、基本的人権の保障などは考慮されていない。
- HDIには環境や「持続可能な発展」に関わる問題は考慮されていない。
- HDIは一人あたり所得の動きと相関をもつので、所得以上の新しい意味はない。
- HDIからは開発政策への示唆は得られない。

しかし、『人間開発報告書』はこれらの批判に答えようとしてきたことも事実である。人間開発指数を改良した指標では、ジェンダー格差を考慮したジェンダー開発指数 (Gender-

related Development Index : GDI) やジェンダー・エンパワメント測定 (Gender Empowerment Measure : GEM)、貧困を多面的に捉える人間貧困指数 (Human Poverty Index : HPI) もある。また、『人間開発報告書二〇〇〇』は人権保障状況の評価に人間開発指数を利用する方法を考察している。また指標化には結びつかなかったが、『人間開発報告書』のテーマでは「人権」「環境」「民主的ガバナンス」といった問題も取り上げられている。

《参考文献》

本文の参考文献は野上裕生 (二〇〇七) 『人間開発の政治経済学』日本貿易振興機構アジア経済研究所、に紹介されている文献を参照されたい。基本公式や統計資料は UNDP (various years) *Human Development Report*, New York : UNDP を参照されたい。特に Sen, Amartya (1999) "Assessing Human Development," in UNDP (1999) *Human Development Report 1999*, p.23 は HDI に対するセンの姿勢を示している、一読に値する。

『アジア研ワールド・トレンド』No.173 (2010.2)